

ふくしまからはじめよう。「食」と「ふるさと」新生運動推進本部  
平成29年1月30日発行

このニュースレターは、「ふくしまからはじめよう。『食』と『ふるさと』新生運動」の「生産再生運動」の一環として発行しています。福島県の農林水産業の復興・再生に向けて先進的な取組をされている方々を紹介していきます。



果樹の特性を生かし愛情こめて育てる  
～もも、西洋なし、りんご～

さいとう しげよし      ともみ  
齋藤 栄慶さん、智美さん（伊達市）

齋藤栄慶さんは、農林水産省農業者大学校で果樹栽培技術・経営等を学び、昭和57年に卒業と同時に就農。就農当初から、味の良い安全な果実栽培をめざして、樹種や品種に応じた樹形や栽培方法を研究しつつ規模拡大を図ってきました。ももの栽培では、複合性フェロモン剤の実証試験や地域全体での予察体制を確立し、殺虫剤削減体系での栽培を行い、安全でおいしい果物の生産を築き上げてきました。

震災及び原発事故後は、樹木に付着した放射性物質を減らそうと、産地一丸となって高压洗浄機での樹皮の洗浄や粗皮削りを行いました。真冬に冷水を浴びたり、脚立から落下する事故も発生。しかし「何とかしなければ」という思いで、約2,200ha、37,000本を一本一本丁寧に洗浄。また、JA伊達みらい（現JAふくしま未来）が全国で初めて取得した国際認証規格ISO9001のマニュアルに則り、放射性物質の自主検査の管理に取り組み、消費者に安全で安心な農産物を届けています。



栄慶さんは平成24～25年、JA伊達みらいもも生産部会の部会長に就任した際、原発事故後の風評払拭に積極的に取り組みました。当時を振り返りると、まさに日々臨戦状態。マスコミや市場・生協関係者の視察、説明会等は年間数十回にも及び、この経験は部会組織の結束をより一層強くしました。

震災後改めて気づいたことは、福島県北地方の肥沃な大地と気候の豊かさ。そして、その気候風土を生かして栽培した果物の美味しさでした。果実を完熟直前まで木に成らせておくため、生育期間が長くなり、気象災害によるリスクが高くなりますが、香りやコクが高く、味はバツグン。特に、西洋なしの主力品種「ドワイエンヌ・デュ・コミス」は、伊達市内でも栽培者が少なく、齋藤さん自慢の逸品です。

現在、直接販売のお客様が徐々に戻ってきているのが嬉しく、「土づくりやせん定作業に更に励み、うまい果物作りに邁進したい！」と笑顔で語ってくれました。

島影盛継さんが就農したきっかけは、会津みしらず柿を生産していた父・力盛さんが平成21年に亡くなられたことでした。

会社員だった盛継さんは、妻・香さんとともに手伝いをしたことはあるものの、父親の指導のもとに作業をしていたため、力盛さんが亡くなった翌年のせん定や摘蕾・摘果は、大変な苦勞がありました。近隣の先輩農家の皆さんに教えてもらいながら成し遂げることができました。

2年間は会社員を続けながらの生産でしたが、平成24年に会社を辞め、ご夫妻で農業に専念することとしました。柿づくりを受け継いだ当初は作業に追われていましたが、作業や作業時期の意味をご夫妻で勉強され、技術の向上に努めています。

父親の代からのお客様には、長年、贈答用として購入していただいております。会津若松市作成の放射能検査結果も添付したため、顧客が減ることはありませんでした。しかし、若い人の果物離れや、核家族化の影響により、贈答の量が徐々に減っている状況にあります。

平成28年4月の凍害、霜害の影響では、例年の2割しか収穫できず、その中でも商品として販売できるものが1割程度しかありませんでした。



贈答用として例年の品質を保証できないため、「長年注文いただいているお客様の信頼を裏切る訳にはいかない」と、贈答用は一切販売せず、お裾分けとしてお客様へ配りました。そうした姿勢には、ご夫妻の会津みしらず柿生産者としての真摯さと誇りを感じます。

ご夫妻は、少しでも長い間、会津みしらず柿をおいしく食べてもらえる方法を模索中。また、パッケージにも工夫を凝らしたいと考えています。

「一生懸命育てた会津みしらず柿を、おいしいと言っただけが一番。ぜひ手塩にかけた会津みしらず柿を食べてください」とご夫妻でおっしゃっていただきました。

## 「会津みしらず柿」を受け継いで行く



しまかけ もりつぐ かおり  
島影 盛継 さん、香 さん（会津若松市）

## 復活！あぶくまのトルコギキョウ、 山木屋地区の復興のさきがけに



あぶくまカットフラワーグループ（川俣町）

あぶくまカットフラワーグループは、伊達郡川俣町山木屋地区でトルコギキョウを中心に切り花生産を行う8戸のグループです。

阿武隈山地北部の夏に冷涼で昼夜の寒暖差が大きい気候に適した品目として、平成元年にトルコギキョウを導入、試行錯誤を重ねボリュームがあり発色のよい高品質な花を生産し、東京の市場等から高い評価を得るようになりました。

震災前の平成22年にはトルコギキョウを3.2haで栽培していましたが、地区全域が計画的避難区域に指定され、苗やハウスを残したまま避難しなければならず、やむなく栽培中止となりました。

しかし、競争の激しい花き市場で、ライバル産地にシェアを奪われてしまうのではという強い危機感から、平成25年に福島県営農再開支援事業による実証栽培を開始しました。実証栽培に向けては、除染を早期に完了させるため関係機関と調整を行い、また、塩類が集積した土壌の改良に取り組みました。仮設住宅からの通勤農業には、避難区域ゆえに、出入り時間には制限がありました。さらにこうした苦勞を乗り越え、本格栽培に向けて準備を進めていた矢先の平成26年2月、大雪によりハウスが倒壊する



災害が発生。

それでも力を合わせ、平成26年4月からグループ全員で栽培を再開し、無事、全戸が8月に市場へ出荷することができました。

震災後、先が見えない中でも、グループのメンバーで定例会を継続し、「トルコギキョウを栽培したい」という全員の思いを途切らせずに活動を続けたことが、全員揃っての営農再開へつながりました。

再開後も激しい産地間競争に打ち勝つため、品種や作型、栽植本数、さらに出荷規格の見直し検討など、品質向上やブランド強化に余念がありません。

現地検討会では、生産者ご夫妻や、若い後継者も一緒に活発な意見交換がされ、トルコギキョウハウスには、笑いを交えたにぎやかな声が響いています。

代表の菅野洋一さんからは「今後は、新たな仲間づくりや新規就農者の研修生受入れも考え、あぶくまカットフラワーグループのブランドの発展とともに山木屋地区の復興と活性化に取り組んでいきたいと考えています」とお話をいただきました。



<http://www9.plala.or.jp/ACFG/index.html>

県立会津農林高等学校の教諭 江川 篤さんは、震災・原発事故の体験を通じ、“食育”についての意識が高まり、子どもたちに直接農業に触れる体験をしてもらうことの重要性を感じていました。

それまでは、水耕栽培を体験させていましたが、農業の基本は土作りが大事で、土に触れるからこそ自然の恵みとありがたさを感じることができると、再度土づくりの勉強に励みました。そうした中、江戸時代の農業指南書「会津農書」に出会い、会津には循環型農業が昔から続け



## 人と種をつなげる会津伝統野菜



福島県立会津農林高等学校  
えがわ あつし  
農業園芸科 教諭 江川 篤 さん (会津坂下町)

られてきたことや、「会津伝統野菜」が栽培されていたことを知りました。さらに、生産農家である長谷川純一さんとも知り合うことができ、会津農林高等学校で会津伝統野菜に携わることとなりました。

会津伝統野菜は、生産者が減るとともに、栽培の継続のためには、種を保存して管理することが必要でした。そこで、営利を目的としない教育機関として貢献できることはと考え、種を守るシードバンクや、会津伝統野菜に関する食育事業や人材育成事業など、生徒へ会津伝統野菜を繋ぐための取り組みを進めています。

また、生徒に実践力をつけてもらうため、地元のシェフや農家などへのアポ取りや連絡はすべて生徒自ら行き、栽培や6次化商品の開発も責任を持って行っています。

江川さんは、「生徒が生産者と直接やりとりをすることにより、農家の方の熱意や思いを受け止め、農業の楽しさに気づいてもらえればと思っている。社会に出てから、このコミュニケーション力が役に立つと信じている」と熱心に語ってくれました。

<http://www.aizunorin-h.fks.ed.jp/>

がんばる農林漁業者は、「ふくしまからはじめよう。『食』と『ふるさと』新生運動」のホームページでも紹介しています。

<http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/fff-syoku-furusato/>

食とふるさと

検索



取材に御協力いただいた皆様に感謝申し上げます。

